コナソニアン・ミュージアム

国立病院機構鈴鹿病院長
小長谷正明

毎年、奉職先の病院で『筋ジス夏祭り』が催されている。毎日が車いすの上で単調な療養生活を送るだけの患者さんたちに多少とも華やいだ気分と、外の世界の息吹も嗅いでもらおうと、児童指導員諸君や保育士さんたちが中心となって企画するフェスティバルだ。体は動かずとも口と頭は達者な患者さんたちの漫才コンテストや川柳大会、ボランティア出演していただく芸能人のステージ、時にはメジャーな歌手や話芸家もいる。高校生のブラスバンドに幼稚園児の太鼓、若者たちのよさこいソーラン踊りと、暑さを吹き飛ばせとばかりににぎやかである。去年などはパラリンピックのゴールドメダリストが北京に出発直前に駆けつけてきてくれた。

隣の会場には鈴鹿ベイ・ロータリー・クラブの会員や夫人たちのサポートによる喫茶コーナーがあり、その奥の一室でコナソニアン・ミュージアム・オヴ・ジャンクが開かれている。つまり、小長谷我楽多博物館だ。ロータリー・クラブのご好意のアイスクリームやケーキに舌鼓をうった患者さんたちは、人工呼吸器搭載の電動車いすの列を作り、目を輝かせながら化石や剥製、標本の陳列を見て回る。

ことの発端はこうだ。ある日、療育指導室長が「筋ジス夏祭り」の決済を求めて院長室にやって来た。机の上のペーパーウェイト代わりのアンモンナイトやカメの化石、テーブルの上の唐三彩の馬などを目敏く見つけ、ドア・ストッパーが古代エジプトのマングース神像なのに気付くと、コレクションを「筋ジス夏祭り」に出品をという。見た目ほど貴重な標本はないし、古代遺物はレプリカばかりだからといったんは断った。が、相手は引き下がらない。

「外国どころか博物館にも行った事もない人たちばかりですから、エジプトでも化石でもカブトムシでも、是非とも見せてやって下さい。患者の好奇心を刺激し、心を豊かにしてやるのも先生の仕事でしょう。それに、僕もちょっとした物を集めているから分かるのですが、蒐集家は死蔵しているだけではつまらない。人に見せたいという欲求もおありでしょう」

大上段に正論を説かれ、裏からコレクター心理もくすぐられ、やむなく承諾する。と、次の管理診療会議で指導室長が発言した。

「＊＊日の筋ジス夏祭りでは、院長先生の珍らなる物のコレクションも展示されます」

会議室に失笑があふれ、赤面の僕は目を伏せた。

子供の頃から昆虫採集はもとより、古銭や貝殻、切手などと、収集癖はあったのは確かだ。が、たいていの人がそうであるように、成長とともに物集め熱は冷めていき、旅行先

のスーベニアを求める程度であった。

ところがである、３０代半ばでのアメリカ留学で昔の収集癖が再燃してしまった。新大陸の生活も１、２ヶ月して、やっとカルチャーショックも治まりかけたころ、近くの教会の庭でフリー・マーケットをやっていた。手造りの人形やキルト、古地図、中にはバズーカ砲の砲弾などという物騒な物まであり、まさに蚤の市、我楽多市だ。見るものすべて珍しかったが、ガラス箱に並んでいる石器に目がいった。売り手のブルネットのお姉さんの説明では、ヴァージニアのインディアンのアロー・ヘッドである。ハウ・マッチ・ザ・プライス？に４ドルだという。耳を疑ったが、つい２５０年前まではネィティヴ・アメリカンは何百万人もが採集経済で暮らしていたのだ、矢じりは無尽蔵にあったにちがいない。で、２個ほど買い求めた。

２、３週間して、今度はゲティスバーグにドライヴした。リンカーンの“人民の人民による人民のための政府”の演説で有名なところだが、実は南北戦争での激戦地だ。大砲やリアルな兵士のブロンズ像が並んでいる古戦場の端にアンティーク・ショップがあった。南軍の旗や当時の小銃や軍刀、大砲まで売っているが、そのような剣呑な物は日本に持って帰れない。目を別のコーナーにやると、白いドングリが一升枡のような箱に入ってたくさん売っている。持つと重い、鉛の銃弾だ。店の小父さんが「スリーリング（三つ輪）の銃弾は北軍、ツーリングが南軍、どちらも一個１ドル半」という。たくさんの銃弾が飛び交った戦場で、戦後しばらくは耕すとジャリジャリと銃弾が掘り返されたという。こんな値段で手に入るならばと、つい、何個かを求めた・・・・。

このようにして、我楽多趣味に火がついた。金がないので、なるべく安くて珍しいものが対象だ。研究で使ったラットや、車にはねられたリスなどの頭蓋骨標本を実験の合間に作り、デラウェアの海岸でカブトガニを採ったりした。そして博物館。ワシントンは住んでいたボルチモアから車で１時間だったので、しばしばスミソニアンの自然史博物館に行った。ここには目を見張るような世界中からの珍奇な文物が集められているだけではなく、ミュージアム・ショップには標本や精巧なレプリカが売られており、つい財布の紐に、いやクレジット・カードに手が動いた。少しずつ増える我楽多を幼い子供たちは、急速に広がった知識の世界の証とし、「うちはコナソニアン・ミュージアムだね」喜んでいた。が、ロッキー山麓のドライヴでムース（へら鹿）の角まで手に入れた時は、流石に家族一同で呆れていた。スペースはとるが値段はしれていた、１００ドルくらいだった。

２年ほどして帰国してからも、一度燃え上がった我楽多趣味は鎮火せず、時々火を噴いた。奈良公園では、畏れ多くも春日大社のお祓い済みの鹿の角を、東京青山の国連大学前のフリー・マーケットでのセンザンコウの剥製、子供の学校のバザーになぜか出品されていた小錦の巨大な手形に食指を動かし、轢かれて砕かれたタヌキの頭蓋骨を立体ジグゾーのようにして組み立てて、コナソニアンを充実させた。もちろん海外旅行でも、トルコではイスミール産のタイル、ベルリンの壁の破片、どこかのバザールではライオンの爪を漁り、ブランド店に足を向けることはなかった。

なにかの国際学会でドイツのミュンヒェンに行った時のことだ。学問の国の学都とあって、自然科学の標本や古代遺物の店が所々にある。ショーウィンドウの古代エジプトの遺品に釣られて店に入り、次々とスカラベや小神像を見せられた。本物だろう、レプリカとは違う自然な古色が漂い、何千年かの風雪を経た物が、つい鼻先目先にある。やはり、オリジナルはよい、品格がある、レプリカばかりではつまらないと、値札のマルク（ユーロ以前だった）を円に換算しながら、品定めをはじめた。すると、耳元に家人の声がささやいた。

「もの事には、自ずとそれ相応の値段があります。遊びのコナソニアンに大金を使うのはどうか？スカラベなんか博物館のように、あるところにはいくらでもあるし、同じように小さくて丸くても、金貨とちがってまさかの時にお金に換えられません」

神の声である、山の神。かくして、わが我楽多博物館には高級品、真のミュージアム・クオリティの文物が収蔵されることは絶えてない．真の我楽多ばかりが処狭しと増殖し、収納場所に困るほどになった。

ともあれ、療育指導室長の提案はまんざらでもない。いくら無価値のジャンクでも、収集家はそれらを並べてみたくなる。で、毎年毎年の筋ジス夏祭りに、コナソニアン・ミュージアム・オブ・ジャンクが開かれるようになった。年ごとにテーマは違えている。古生物の年、古代エジプトやヨーロッパ中世の年、現世生物の年、昆虫と貝の年などである。

古生物の年はサーベルタイーガーの頭蓋骨や魚竜化石のレプリカがメインだが、国立科学博物館でやっていた『ティラノサウルス展』で求めた、実物大の歯のレプリカも並べた。長さ２５センチもある。その歯の持ち主がどの程度の頭であったかを、カナダの博物館で撮ってきたティラノサウルスの頭蓋骨写真を実物大に拡大コピーし、女性指導員さんたちが張り合わせてパネルを作ってくれた。ついでに、コナソニアンの命名主たちがワシントンの博物館前の実物大トリケラトプスの上でたわむれている、ファンタスティックなパネルも作ってくれた。いつの間にか大きなお孫さんがいたのですねと、女性職員に聞かれたが、２０数年前の小学生たちは未だに独身である。ともあれ、わが家では、戸棚の中に雑然と押し込まれている品々も、説明のタグつきでレイアウトを考えて並べられると、いっぱしの文化財のようで、患者さんたちも職員も、ワァーと声を上げて感心してくれた。

昆虫の年。これはレプリカではなく、ほとんどが本物の標本だ。模型もありはするが、ヴェネティアのガラス細工で、本物より高価である。世界中の甲虫の標本だけは、ちょっとしたコレクションと自負している。子供の頃の昆虫採集が出発で、オーストラリアのホテルに飛び込んできた緑色に輝くカナブンを興奮で手を震わせながらで捕まえたこともある。もっとも、自分でコンゴやアマゾンの密林に採集旅行したわけではないので、かつては聖徳太子、今は福沢諭吉さんのおかげである。が、採ったにしろ買ったにしろ、生きている宝石と言われる熱帯のコガネムシ・カナブン類に、みなさんの目が奪われたにちがいない。ただし、並べても虫は小さい。最大のゴライアスオオツノコガネでも、手のひら大

だ。で、これらもデジカメで接写して拡大し、パネルにして雰囲気を盛り上げた。夏祭り後、昆虫のパネルは病棟や協賛してくれた幼稚園に引き取られ、そこで壁に飾られている。

その昆虫展のとき、いわゆる成人型神経筋疾患の患者さんが僕にリクエストしてきた。虫の真上から撮った写真をくれという。ゴライアス・オリエンタリスという、白黒のアミ目模様がくっきりとしたフォトジェニックな大きなコガネムシだ。手元になにかの印刷物に使った、おあつらえむきの写真があったので、それをあげた。１年以上も経って、そんな事をすっかり忘れてしまった頃、病棟をラウンドしていると、その患者さんが師長さんに頼んで新聞紙大の額を差し出してきた。見るとあのゴライアスを彫り出した伊勢型紙である。オリジナルをリアルに拡大し、曲線部分もきれいに彫り貫いている。彼は余暇活動で伊勢型紙に励んでおり、土地のプロの職人から折り紙を付けてもらったほどの腕前である。聞くと、はにかむような笑みを交えながら答えてくれた。

「もう、以前ほどには手先に力が入らず、大作もできなくなったけれども、なんとかと思って、療育活動の時間に彫った。毎年夏祭りで目を楽しませてくれるので、この虫で伊勢型紙を先生に彫ってやろうと考えてな。半年かかった」

凄い気力と時間が凝縮している額である。また、コナソニアンが増えたにちがいないが、家にしまっておくのはもったいない、どこかに飾ろうと考えた。外来の待合室や廊下はもう一杯だ。古い建物の病院美化のためにと、研究検査科長のドクターが趣味で集めた絵画を飾ってくれていて、すでにギャラリー化している。で、自分がよく使う診察室の奥に掛けた。聞かれたら、どういう作者かを答えようと思っている。が、外来患者さんは自分の事で精一杯なので、目を壁にやる余裕はないようだ。

入院患者さんのフェスティバルは年２回行われている。冬はクリスマス会だ。僕の役割はサンタ・クロースなので、コナソニアン・ミュージアムは開かれない。が、ある年、件の療育指導室長がニコニコさせながらやって来た。

「いやぁ、今度のクリスマス会は、先生の夏祭りにならって、私の集めたものを展示します。お恥かしいようなものですが、すこしは珍しいコレクションだと思います」

当日、ジングルベルが響き、ロータリー・クラブ夫人たちの介添えで患者さんたちがノンアルコールシャンペンに、クリスマスケーキに舌鼓を打っている喫茶スペースの奥の小部屋を覗いてみた。取っ手のついたビーカーや鍋のような丸いガラスの器がたくさん並んでいた。よく見ると、ガラスにはレースや篆刻で模様がついている。着色されているものもある。不思議そうな顔で質問する患者さんたちに、丸顔で丸眼鏡の療育指導室長は汗を拭き拭き説明をしていた。彼はここ十年来、ヨーロッパの古いガラスの溲瓶やオマルを収集してきたとのこと。昔は西洋でもトイレはなかったのでと。なるほど、誉められて汗顔の至りとはこのことだ。

蒐集癖は、満たされなかった何かの代償で、精神の一部が子供時代に戻るからにちがいないと、自分では思っている。他人からみれば馬鹿馬鹿しいような、巨大食玩や石ころに

虫けら、溲瓶が、教授だの行政だの院長だのからのプレッシャーからの逃避だとしても、肉体的に動けず、すべてにもっと満たされていない患者さんたちに、多少とも非日常的なワールドを提供できたのなら、それはそれで幸甚にちがいない。